

アルパインクライマー 山岳カメラマンニワ流で活躍中！



2月16日、植村直己さんの母校の明治大学紫紺館（東京都千代田区）で、2016「植村直己冒険賞」受賞者発表の会見を行いました。

今回は、2016年に日本人が挑んだ184件の冒険行の中から、平出和也さんを受賞者として決定しました。平出さんは、ヒマラヤなどを舞台に、未知への探求をテーマにして、新ルート登頂や無酸素登頂、山頂からのスキー滑降など、オリジナリティのある登山を実践する世界的なアルパインクライマー（山岳登山家）で、これまでに8千m峰5座やエベレスト3回登頂を果たしてきました。また、平出さんはその様子をリアルに撮影して、記録を残しています。カイトを使用しての空中撮影など、誰にもまねできない冒険と撮影を両立しています。

東京での会見の様子は、植村直己さんの母校の府中小学校に中継され、平出さんは「自分で切り拓く活動をしたかったところ、山が見つかった。また撮影することで特に若い人たちに伝えたかった。冒険賞を受賞することができ、大変光栄に思う」と喜びの言葉を述べました。

なお、本賞の授賞式を、9月30日（土）に日高文化体育館で行います。冒険賞の授与の他、平出さんの講演も行いますので、ぜひ、お越しください。

《問合せ》植村直己冒険館
☎ 44-11515

平出和也さん

アルパインクライマー
1979年 長野県生まれ
神奈川県横浜市在住



東海大学山岳部で登山を学び、在学中にクーラカンリ東峰（中国チベット自治区）初登頂、チョー・オユー（中国チベット自治区）無酸素登頂。

2008年クライミングパートナーの谷口けいさんと共にカメット南東峰（インド）初登山。その功績が認められ、2009年に登山界の最高の栄誉ともいわれる「ピオレドール賞（金のピッケル賞）」を日本人として初受賞した。

近年では多くの隊に帯同し、写真、映像を数多く残している。



▲東京会場の平出さんにメッセージを送る府中小学校6年の橋本健太郎君



▲「冒険賞」を受賞し、喜びを語る受賞者の平出さん

全て自分の意思で決める、それが山の魅力

平出和也さんは学生時代、陸上部に所属しており、大学時代には競歩で全国クラスの選手でした。しかし、決められたルールの中で他人と競う競技スポーツにむなしさを感じ、山岳部に入部。2001年にはクーラカンリ東峰(7381m)初登頂を果たし、山と共に生きる人生がスタートしました。

「山に登る前、自分は何のためにどこに行くのか、誰と行くのか、何を持って行くのか、全て自分で決めなければならぬ。そこに本質がある。その過程に最も充実感、やりがいを感じ、山頂に立てたかどうかは大きな問題ではない。たとえ撤退しても、そこに大

きな悔しさはない」と山の魅力を語ります。

隠された課題を見出す嗅覚、技術、バランスが必要

「今の若い人の多くは、課題を与えると良いパフォーマンスを示す。けれど、ちよつとグラウンドの外に出ると何もできなくなってしまう人が多い。登山では、困難な未踏のルートを切り開く能力の方が重要」と平出さんは考えます。

実際に、国内外で平出さんより「登れる人」は数多くいます。平出さんが人より優れている部分は、人のやったことのない「課題」を見つめる嗅覚です。そして、それを成し遂げる能力、そのバランス感覚が備わっています。

いくら登る技術があっても、その課題を見つめることができなければ、そこには絶対

にたどり着くことはできません。「ピオレドール賞(金のピッケル賞)受賞時も、カ

誰もたどり着けない場所、その映像を撮ること

平出さんのもう一つの顔が、山岳カメラマンです。多くの隊に帯同し、他の誰にも撮れない「映像を残しています」。

「7kmを超える極限的な状況で、数kgものカメラ機材を担いで登ることは大変な負担。それを行える人間は、世界でもそう多くはいない。山で撮影をすることは、もう一つの生きていく道。そこには自分しか撮ることのできない世界がある。そしてその世界をリアルに伝えることで『山

に行ってみよう』という人が増えれば良い。また、登山家のイメージアップにもつながる」と撮影の意義を話す平出さん。しかし、カメラ機材を持つていくことは、他の重要な登山装備を切り詰めることにつながりかねません。

「2005年、パートナーと話し合っ、重量を抑えるために食料を最低限にし

て、寝袋を持たずに登山した。でも、カメラは持つて行った。生きるために必要な装備は、人に伝えるための装備は違ふ。その時、結果的に足が凍傷になったが、できることを全てやっていたので、その事実を受け止めることができ

た。また、失敗からの反省が、それ以降の登頂につながっている。必要なもの、不必要なもの、そのバランスが改善された」と失敗を失敗で終わらせません。

「ある意味危険な、困難な環境に身を置くことで、普段の生活がなんて素晴らしいものなんだと思えるようになった。当たり前だが、安全が確保されていることが、実は当たり前前のことではない。そのことを、再認識することができると平出さんは断言します。

普通の生活も、当然と思いついてしまふようなことも見逃さずにいることができる、偽りのない自分自身と向き合える貴重な時間であると…。



▲カメット登山中

「ピオレドール賞(金のピッケル賞)受賞時も、カ

植村直己冒険賞特別賞に 「はんしん自立の家」甲山登山隊

登山家や学生などのサポートで登山を実施

障害者支援施設「はんしん自立の家」から見える甲山。「いつか山頂に登ってみたい」との入居者の声に、施設長の石田英子さんが親交のあった登山家の續素美代さんに相談し、2006年秋から登山を開始しました。

関西学院大学や神戸医療福祉専門学校の学生ボランティアのサポートを受け、歩ける人はそれぞれのペースで、車いすの人は1台を4人の学生が交代で担いで登りました。

この挑戦は、雨天中止の2013年を除く計10回を数えました。夢を抱いて11年…施設の入居者のうち希望者全員が頂上から景色を見えるという願いが今回かないました。



▲山の頂上で喜びがあふれる